

そうでなくとも彼女の声は小さく、私の耳はボソコツだったので、終始マスクをつける喜らしさとなつて私は大変困っている。彼女の声はほとんどマスクに吸いこまれてしまつて聞こえない。こういう事態になつて気づいたのだけけれど、モスキートな声の断片と、表情や口元の動きの観察結果をつなげ、脳内予測変換機能を駆使して、彼女と会話していたらしい。目は口ほどにものを言うというけれど、顔の半分もマスクに隠れると、想像では捕いきれない。



かくらこう

マスクに  
吸いこまれる  
彼女の声

## どこまでもつづく横断歩道の話

「本当はドクダミを抜こうと思ったんだ。白い花が咲くと、蟻を蜂蜜のビンに閉じこめたのを思い出すから、胸がぎざぎざする。月食の日だよ。コンビニもチカチカ点滅して、振り返ったら発光して暗くなった。消滅したんだね。道が暗くてね、点字ブロックだけ光ってた。風もなく、水槽の底を歩くみたいだった。そのうち、横断歩道が見えて。ずっとまっすぐ、ずうっと遠くまで、白線が浮かんでね。孔雀が立ってた。川が流れもしないでぬったりと淀んでるの。歩いてても歩いてても横断歩道が続いて、どこかでサイレンが鳴り始めて、溶けた月が落ちかかって、読経もラップされちゃって、私の肩くらいある蟻が駐車場の自動販売機を壊して、それでどうしても食べたくなくて久々に買った」

静かに、しかし喜びを隠しきれないといった調子で彼女が語り、皿へ移したのは、町で有名な洋菓子店の、白いクリームをサンドした大きな分厚いリーフパイだった。

「……ドクダミは？」

おそるおそる私が質問すると、彼女は下脛をぴくつかせて首を傾げ、皿を持って壁を向き、マスクを外してサクサクとリーフパイを食べ始めた。

私もマスクを外しアルコールシートで手を拭いて、狐のお金みたいなパイにかじりついた。

## 踊るべき信号機の話

「公園前の信号機がさ、踊れに変わったものだから鳩も踊りながら渡るんだよ。私は米が重くて根をあげちゃった」  
深刻そうに眉根を寄せて、犬の糞をビニール袋へ片づけながら彼女は話した。  
私は周囲を見渡した。信号機の緑色が、ただの〈歩く人〉であることを確認したかった。遠くの信号機が赤だった。その下に待機する人物が踊っているのか歩いているのか。

いつまで休んでるつもり？ と芝犬がリードを引いてきた。すでに始末を終えた彼女が前方へ進んでいて、急ぎ芝犬と共に追いかけた。

## 歩道橋にのぼった話

彼女は歩道橋に目がない。道路を渡る用事がなくとも、歩道橋があれば必ず階段をのぼる。展望台なのだ。道へ飛びこむのではないかとヒヤヒヤするくらいに身を乗り出し、上機嫌でここそと喋る。

「湖に映った月が実は大きな蛍だったからね」

「六道の境界でシスターが溶岩を焼いたの」

「おじさん、ハレー彗星に乗って行ってしまったからずっと留守なんだ。イトコが海賊」

同じ高さから下界を眺めている。脳内変換される彼女の話に触れていると、道路が光の泳ぐ川に見えてくる。世界をただそうとして、聞き返すと、彼女は得体の知れないものに出会ったような目つきになった。やはり私の脳の回路が混線しているのだろう。

「耳に死んだ猫の毛が詰まったままなんだね。早く慈悲科に行つて診てもらおうといいよ」

彼女は真剣に心配してくれる。腕のいい慈悲科を探そうと思う。

<https://www.kakura-ohanasicafe.com/>

Twitter@ohanasicafe

©2021 Kakurakou

発行 おはなしの喫茶室

作 かくらこう

令和3年6月18日発行

第6回パーパーウエル参加作品「散歩」

